中高年期における自己認識欲求^{1,2}

江戸川大学 上瀬由美子³

Self-Recognition Need in the middle aged and elderly

Yumiko Kamise (Department of Sociology and Human Studies, College of Sociology, Edogawa University, Komaki, Nagareyama 270-0198)

The purpose of this study was to investigate developmental changes in Self-Recognition Need (SRN; Kamise, 1992), measuring the need of middle aged and elder people. One hundred and ninety eight (198) men and women in their forties, and 199 in their sixties filled a questionnaire that measured SRN. Results showed that SRN declined with advancing years, and it was higher in women than in men. Targets of SRN also changed with advancing years. Men in their forties and women in their sixties directed their SRN toward their interpersonal and future selves, women in their forties toward their current and future selves, and men in their sixties toward their past selves.

Key words: self-recognition need, middle age, elderly, self concept, developmental changes.

本研究では、自己への関心が中高年の男女にどの程度存在し、また年代によってどのように変化するかを、自己認識欲求(上瀬, 1992, 1996)の視点から検討する。

自己を知りたいと感じ自己情報を求める傾向は、青年期の特徴として論じられる場合が多い(久世, 1980; 西平・五味, 1979)。これは、自己への関心が主として青年期における同一性確立の過程で生じ、青年期に自己が完成すると考えられてきたことに関連している。ただし、Levinson (1978 南訳, 1980)をはじめとする近年の成人発達研究により、成人期にも新たに取り組むべき発達課題が存在することが指摘されるようになった。これにともないアイデンティティ研究の視点から、青年期後の自己発達にも関心が向けられるようになった。たとえば、岡本(1985)は中年期の心理的变化の特徴をErikson (1950 仁科訳, 1977)の心理・社会的課題の観点からとらえ、その展開のプロセスを検討している。また岡本・山本(1992)

は、定年退職を自我同一性の危機的状況として位置づけ、同一性ステイタスと定年退職に対する認知タイプとの関連を検討している。これらは主としてアイデンティティ確立の視点に基づき、定年退職といった特定の危機的状況との関連から自己の発達をとらえたものと位置づけられる。しかし、自己への関心が青年期後にどの程度存在し、年代によってそれがどのように変化していくのかを明らかにする場合には、卒業や退職といった特別の時期における自己ではなく、さまざまな状況にある人々を全体として分析する必要がある。

一方、時間的展望の研究も、青年期後の自己への関心について示唆を与えている。たとえば、都筑(1993)は、大学生を対象とした調査から、アイデンティティを確立した者は、現在の自分よりも将来の自分をより重視することを明らかにしている。また白井(1991)は、青年期から中年期を対象とした調査を行い、時間的展望の獲得⁴と利那主義や展望主義との関連を分析し、中年期において未来指向性が高くなると考察している。以上の研究から、青年期後も、自己の発達にともない、自己への関心の程度や、関心がもた

¹ 本研究は、上瀬(1995a, 1995b)で発表したデータを、再分析したものである。

² 本研究は、平成6年度文部省科研費補助金奨励研究A(課題番号06710088)の助成を受けて行われた。

³ 本研究論文の作成にあたり、日本女子大学の本間道子教授、筑波大学の松井豊助教授の指導をうけた。ここに深く感謝いたします。

⁴ ここで、時間的展望の獲得とは、より遠くの将来や過去の事象が現在の行動に影響を及ぼすという時間的展望の広がりが増大すること、将来に希望をもち現在の生活に充実を感じ過去を受容するという時間的展望の感覚をもつことを意味している。

れる側面に変化が生じると推測される。ただし時間的展望に関する研究の多くは、展望の広がりや時間意識という点から抽象的に測定するにとどまっており、自己への関心の内容的側面の検討が十分には行われていない。

ところで、上瀬（1992, 1996）は、自己情報の収集行動を生起させるものとして自己認識欲求という仮説的構成概念を提出している。自己認識欲求は以下のように規定される。“自己に関する認識体系を明確にしたいとする欲求。ここで認識体系とは自己に関する知識の総体であり、またそれらが構造化されたもの。この自己認識体系が不明確になったとき、自己に関する情報収集行動を促す。”ここで自己は自己概念と同義であり、自分自身に関する知識の総体を意味し、認識体系の明確化とはその知識が社会的行動を起こすのに十分な量を持ち、知識同士が矛盾なく統合されている状態とされる。さまざまな不適応状況やライフスタイルの変化などは、自己概念を不明確にし、自己認識欲求を喚起させると考えられている。

上瀬（1996）や上瀬・堀野（1995）では、大学生を対象として自己認識欲求の喚起と解消に関する仮説が支持されている。このメカニズムは普遍的なものと仮定されているが、成長にともないライフスタイルが変化することによって、自己概念不明確感が生じる状況や、自己認識欲求の強さ・内容に変化がみられることが予測される。したがって、さまざまな年代の自己認識欲求を比較することによって、自己への関心の年代的变化を検討することができると考えられる。さらに、自己認識欲求が自己のどの側面に特に強く関連しているかを明らかにすることによって、自己概念のどの部分が再構成化されているのかという、自己の発達過程の詳細を検討することができると予測される。

以上の問題意識をふまえ、本研究では、自己への関心が青年期後の男女にどの程度存在するのかを、自己認識欲求の視点から検討することを第一の目的とする。この目的からみると、研究の対象となる年代としては、20歳代以降のあらゆる年代を取り上げることが望ましいが、本研究ではまずこのなかから40歳代と60歳代の男女を取り上げ、調査を行う。これは既存の発達研究（たとえば Levinson, 1978 南沢, 1980）において、40歳代前半が中年への過渡期、60歳代前半が老年への過渡期とそれぞれ位置づけられており、自己認識欲求の背景となるライフスタイルの変化や心身の変化と、自己への関心の問題をより検討しやすいと考えたからである。また、青年期後の自己発達を扱った従来の研究では、調査や面接の対象者を、特定の職場や状況にある人々に限定したものが多かった。しかし、青年期後にどの程度自己への関心が継続しているかを明らかにするためには、かたよりのない調査対象者を抽出する必要がある。そこで本研究で

は、無作為抽出法を用いて、首都圏に在住する40歳代・60歳代の男女を調査対象者として抽出した。

さらに本研究では、自己認識欲求が特に喚起されやすい自己の側面や状況を年代間で比較することを第二の目的とする。この目的にそい、調査項目として自己のさまざまな側面別に自己について知りたい程度を尋ねた。また、自己概念不明確感やライフスタイルの変化など、自己認識欲求喚起の背景と考えられる要因（上瀬, 1996）も質問項目に加えた。自己認識欲求の仮説に基づけば、ライフスタイルの変化等が自己概念不明確感をもたらし、それが自己認識欲求喚起につながると予測される。これらの項目への回答傾向を年代別に比較することにより、従来の研究とは異なる視点から自己発達の過程を明らかにできると考えられる。

方 法

質問紙構成

本調査は質問紙法によって行った。

自己認識欲求を測定する項目 既存研究で用いられた自己認識欲求尺度は、青年期を対象として作成されている。そこで本研究では、中高年の自己認識欲求を次の2側面から新たに測定した。

1. 自分を理解したい程度

“あなたは‘自分についてもっと理解したい’と思うことがありますか”という質問について、“4. よくある”―“1. 全くない”の4件法で回答を求めた。この問は、一般的に使用されている表現を用いて自己に向けられる関心の強さを全体としてとらえることを意図している。

2. 側面別にみた自分について知りたい程度と自己認識欲求尺度

(a) 側面別にみた自分について知りたい程度（側面別自己認識欲求）：上瀬（1992）の自己認識欲求尺度、および10歳代から60歳代の女性を対象とした予備調査の結果をもとに、“自分の性格についてもっとくわしく知りたいですか”など自己の特定の側面についてどの程度知りたいかを尋ねる項目を独自に15項目作成した（項目の例はTable 4参照）。回答は“4. とても知りたい”―“1. 全く知りたくない”などの4件法で求めた。

(b) 自己認識欲求尺度：側面別に知りたい程度を尋ねた15項目への回答について主成分分析をした結果、40歳代・60歳代いずれについても、第1主成分に高い負荷量を示した。そこで、この15項目の回答を単純加算して、自己認識欲求を測定する尺度得点とした。したがって、この尺度得点が高いほど自己認識欲求が高いことを示している。

自己認識欲求喚起の背景に関する項目 本調査では、自己認識欲求喚起の状況を明らかにするために、

自己概念不明確感と最近のライフイベントを取り上げ、さらに不適応感の指標のひとつとして社会参加意識の喪失を取り上げ、自己認識欲求との関連を分析する。

1. 自己概念の不明確感に関する項目

上瀬・堀野 (1995) の自己概念不明確感測定項目から3項目を用い、本研究で新たに作成した1項目を加えて、計4項目を使用した⁵。回答は、“あてはまる” “あてはまらない” の2件法で求め、“あてはまる” とした項目の合計数を、自己概念不明確感尺度得点として使用した。

2. ライフイベント

高橋・波多野 (1990) を参考にし、“親と同居するようになった” “大きな病気やケガをした” など独自に25項目を作成した。回答は“あてはまる” “あてはまらない” の2件法で求めた。回答集計の結果から該当者の少ない項目を除き、残りの項目について、“あてはまる” とした項目の数を再カテゴリー化するかたちで、最終的に“家族関係の変化” “心身の不調” “経済状況の悪化” の3尺度を作成した⁶。各尺度の得点範囲は、1点—2点である。

3. 社会参加意識の喪失

“自分は社会のなかで、自分なりの役割を果たしていると思う” “自分は、社会の動きから取り残されたように感じる” の2項目を独自に作成し、“あてはまる” “あてはまらない” の2件法で回答を求めた。そして両項目の回答結果を再カテゴリー化するかたちで、“社会参加意識喪失” の尺度を作成した⁷。この尺度の得点範囲は1点—2点である。

調査対象者および調査方法

調査対象者は、東京都三鷹市在住の40歳代・60歳の男女を母集団とし、その中から抽出された計613名である。対象者は以下の手続きによって抽出され

Table 1
未婚の別 (%)

	40歳代 男性	40歳代 女性	60歳代 男性	60歳代 女性
N	99	99	100	99
既婚	79.8	86.9	98.0	66.7
未婚	15.2	6.1	0	6.1
離別・死別	5.1	7.1	2.0	27.3

Table 2
就業形態 (%)

	40歳代 男性	40歳代 女性	60歳代 男性	60歳代 女性
N	99	99	100	99
フルタイム	80.8	30.3	57.0	8.1
パートタイム	0.0	19.2	5.0	6.1
その他	10.1	7.1	16.0	12.1
勤めていない	9.1	43.4	22.0	73.7

た。まず調査対象地域内の全町丁単位から20地点を抽出し、各地点内から40歳代男女各5名、60歳代男女各5名、計20名を無作為抽出し、総計400名を正規標本とした。また、各地点ごとに各層5名ずつ同様のサンプリング法を用いて予備標本として設定した。正規標本で各層5名が回収できなかった地点については、予備標本を順に調査対象とし、各層5名が回収できた時点で当該地点の調査を終了した。調査期日は1995年2月、調査方法は訪問留置法を用いた。有効回収標本数は、397名 (40歳代男性99名、40歳代女性99名、60歳代男性100名、60歳代女性99名) であり、正規標本 (400名) と使用した予備標本 (215名) とを母数とした有効回収率は64.8%である。

調査対象者の属性

調査対象者の属性は、Table 1 および Table 2 に示すとおりである。

結 果

自分を理解したい程度

“自分についてもっと理解したいと思うことがあるか” に対する性・年代別の回答結果を Table 3 に示す。60歳代男性の関心は他層に比べて低めであるが、全体では“よくある” “たまにある” をあわせた肯定層が5割を超えている。さらに“よくある” を4点—“全くない” を1点として得点化し、回答の平均値について、性 (男・女) × 年代 (40歳代・60歳代) の2

⁵ 以下の4項目を使用した。“自分についての考えが変わりやすい” “他人が見ている自分” と“本当の自分” との間にズレがあると感じる” “今の自分は、‘こうありたい’ という自分の姿とかけはなれている” “自分について、わからないと感じる部分がある”

⁶ “家族関係の変化” は、“親の衰えが目立つ” “子供が手を離れたと感じる” でひとつでも“あてはまる” と回答したものを2、両方に“あてはまらない” と回答したものを1と得点化した。“心身の不調” は、“体調がすぐれない日が続いた” “気分がすぐれない日が続いた” でひとつでも“あてはまる” ものを2、両方に“あてはまらない” ものを1と得点化した。“経済状況の悪化” は“経済状態が悪化した” に“あてはまる” ものを2、“あてはまらない” ものを1と得点化した。

⁷ “社会参加意識喪失” は、“社会で役割を果たしている” に“あてはまらない” と回答し、かつ“社会の動きから取り残されたと感じる” に“あてはまる” と回答したものを2とし、それ以外を1と得点化した。

Table 3

“自分についてもっと理解したい”と思うことがあるか(%), および, 数値化後の平均値と標準偏差

	40 歳代 男 性	40 歳代 女 性	60 歳代 男 性	60 歳代 女 性
<i>N</i>	99	99	98	99
4. よくある	16.2	16.2	5.1	20.2
3. たまにある	41.4	44.4	38.8	28.3
2. ほとんどない	33.3	33.3	45.9	41.4
1. 全くない	9.1	6.1	10.2	10.1
<i>M</i>	2.6	2.7	2.4	2.6
<i>SD</i>	0.84	0.81	0.74	0.93

性の主効果: $F(1, 391) = 2.35, ns.$

年代の主効果: $F(1, 391) = 5.07, p < .05.$

要因の分散分析を行った。その結果, 年代の主効果がみられ, 40 歳代のほうが有意に得点が高かった。性の主効果, および年代と性の交互作用は有意ではなかった。

各側面の自己認識欲求

自己の各側面別の回答は, Table 4 に示すようになった。両年代とも“現在の健康状態を知りたい”とす

る傾向が最も高かったが, その他では“自分が今後したいことをみつけない”“これからできることを知りたい”など自己の可能性に対する関心が相対的に高くなっている。

各側面に対する回答について, 性×年代の2要因の分散分析を行った (Table 4)。その結果, ほとんどの項目で年代と性の有意な主効果がみられたが, 交互作用はいずれの項目についても有意ではなかった。全体を通して, 40 歳代のほうが 60 歳代よりも, 女性のほうが男性よりも, 各側面の自己認識欲求が高かった。

続いて, 年代による回答傾向を明確にするために, 双対尺度法を用いて分析を行った。まず各側面に対する肯定率 (“とても知りたい”+“少し知りたい”) を x 値, 性・年代別のグループを y 値として, 双対尺度法を用いて解析した。抽出された第 1 軸と第 2 軸に対するスコアを x 値・ y 値同時に平面にプロットした結果を, Figure 1 に示す。

Figure 1 の布置をみると, 40 歳代女性, 60 歳代女性と 40 歳代男性, 60 歳代男性という三つのまとまりがみられる。40 歳代女性は“容貌”“スポーツ”“将来すべき生き方”などに対する関心が他側面よりも相対的に近く位置している。40 歳代男性と 60 歳代女性は知りたい内容が類似しており, “他人の気持ちがかかっているか”“これからできること”“社交能力”

Table 4
側面別の自己認識欲求

	<i>N</i>	40 歳代		<i>N</i>	60 歳代		性の 主効果 <i>F</i> 値	年代の 主効果 <i>F</i> 値
		男性 平均 (<i>SD</i>)	女性 平均 (<i>SD</i>)		男性 平均 (<i>SD</i>)	女性 平均 (<i>SD</i>)		
社交的能力がどのくらいあるか	198	2.40 (0.92)	2.53 (0.90)	196	2.24 (0.78)	2.64 (0.90)	8.48**	0.09
性格	198	2.48 (0.94)	2.66 (0.93)	196	2.26 (0.88)	2.61 (0.86)	8.38**	2.13
容貌は同年代の人と比較してどの程度魅力的か	197	2.12 (0.95)	2.50 (0.90)	197	2.14 (0.82)	2.37 (0.91)	11.36***	0.34
自分にあった生き方	198	2.62 (0.98)	2.92 (0.96)	196	2.36 (0.93)	2.63 (0.98)	8.79**	7.81**
自分にあった趣味	197	2.53 (1.00)	2.98 (0.97)	196	2.36 (1.02)	2.63 (0.98)	13.14***	6.52*
自分にあったスポーツ	198	2.62 (0.99)	2.96 (0.91)	198	2.36 (0.99)	2.58 (1.01)	8.11**	10.46**
人より優れている点	198	2.56 (0.91)	2.80 (0.88)	195	2.24 (0.89)	2.55 (0.96)	8.98**	9.61**
家族や周囲の人からどうみられているか	198	2.44 (0.86)	2.71 (0.87)	196	2.35 (0.81)	2.49 (0.92)	5.39*	3.24+
過去にしたこと, それが正しかったのか	198	2.36 (0.85)	2.37 (0.87)	194	2.29 (0.94)	2.47 (0.93)	1.13	0.02
これからの人生で自分には何ができるのか	198	2.95 (0.87)	3.23 (0.83)	194	2.67 (0.97)	2.95 (0.94)	9.40**	9.47**
今後どのように生きていくべきか	197	2.36 (0.83)	2.66 (0.93)	196	2.12 (0.92)	2.39 (0.88)	9.82**	6.56**
自分がしたいことをみつけない	198	3.00 (0.93)	3.31 (0.80)	196	2.69 (1.02)	2.87 (1.01)	6.49*	15.45***
人の気持ちがどの程度わかっているか	198	2.86 (0.89)	3.03 (0.78)	195	2.55 (0.86)	2.88 (0.87)	8.28**	6.99**
どうすれば経済的に豊かな生活ができるか	198	2.83 (0.95)	3.04 (0.86)	196	2.64 (0.99)	2.78 (0.95)	3.39+	5.62*
今の健康状態	198	3.13 (0.80)	3.33 (0.73)	196	3.05 (0.99)	3.19 (0.87)	3.98*	1.66

注) 値が高いほど, “知りたい”と回答したことを示している。

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .1$

交互作用はいずれも有意ではなかった。

Figure 1. 自己について知りたい内容と年代の関連。

“性格”などに布置が接近していた。60歳代男性は、“健康”“過去の意味”に布置が接近していた。

年代を通してみると、40歳代男女と60歳代女性では、現在の自己の姿とあわせて、将来の自分への関心が高くなっていた。それに対し、60歳代の男性では、現在の自己のほかに自己の過去にも関心が向けられていた。

自己認識欲求尺度得点の変化

側面別自己認識欲求の回答を合計して算出した自己認識欲求尺度得点について、性×年代の2要因と分散分析を行った (Table 5)。その結果、性、年代とも、いずれも有意な主効果がみられた。性別にみると、女

性のほうが男性よりも自己認識欲求が高い。また、年代別にみると、40歳代のほうが60歳代よりも、自己認識欲求が高い。

なお、本研究では自己認識欲求を測定する項目として、自己認識欲求尺度と、“自分についてもっと理解したいと思う”の二つを設定した。両者の相関を算出した結果、 $r=0.52$ ($N=382, p<.001$) であり、類似の心理傾向を測定していることが示された。そこで、以下では記述が煩雑になることを避け、自己認識欲求の測定項目として自己認識欲求尺度のみを背景分析の対象として残すこととする。

自己認識欲求喚起の背景

自己認識欲求喚起の年代差を明らかにするために、就業形態・未婚・既婚の別・ライフイベントの3尺度得点・社会参加意識によって、自己認識欲求尺度・自己概念不明確感に差がみられるか、自己認識欲求の仮説に基づいて重回帰解析を行った⁸。

Table 6 をみると、自己認識欲求の背景に自己概念不明確感が、自己概念不明確感の背景にライフイベント等の各背景要因があることが示され、自己認識欲求

Table 5
自己認識欲求尺度得点 (性・年代別の平均値)

	40歳代 男性	40歳代 女性	60歳代 男性	60歳代 女性
N	99	96	94	94
M	39.25	43.12	36.34	39.78
SD	9.39	9.36	10.12	10.45

性の主効果： $F(1, 379) = 13.21, p<.001$

年代の主効果： $F(1, 379) = 9.56, p<.001$

⁸ 就業形態については、フルタイムを2、それ以外を1と得点化。未婚・既婚については、既婚者を1、それ以外を2と得点化した。

の仮説が大すじとして支持されている。しかし各要因の関連の強さや、自己概念不明確感を生じる背景は、性・年代によって異なっていた。

40歳代男性では、心身の不調が自己概念不明確感に結びつき、それが自己認識欲求を喚起させていた。また、社会参加意識喪失も、自己認識欲求の高さに関連していた。40歳代女性では、未既婚の別（夫がいないこと）や家族関係の変化という家庭の問題が、自己概念不明確感に結びついていた。ただし、自己概念不明確感から自己認識欲求へのつながりは弱く、重相関係数の値も有意ではなかった。60歳代男性では、経済状態悪化や家族関係の変化が自己概念不明確感に結びつき、自己認識欲求喚起につながっていた。60歳代女性では、社会参加意識喪失と未既婚の別（夫がいること）が自己概念不明確感を高め、それが自己認識欲求を喚起させていた。

考 察

中高年の自己認識欲求

本研究では、自己への関心が青年期後の男女にどの程度存在するかを、自己認識欲求の視点をもとに検討することを第一の目的としていた。

“自分についてもっと理解したいと思うか”に対する回答をみると、全体では“よくある”“たまにある”をあわせた肯定層が5割を超えていた。この結果は、青年期後にも自己への関心が継続していることを確認するものである。

従来、自己への関心の問題は同一性確立の見地から青年期に特徴的なものとして注目されることが多かった。しかし本研究の結果から、青年期にみられる同一性の再吟味という限定的状況になくても、青年期後も、日常的に自己への関心がもたれていることが明らかとなった。

自己認識欲求の年代差

本研究の第二の目的は、自己認識欲求が特に喚起されやすい自己の側面や状況を年代によって比較することであった。分析の結果、自己認識欲求が生じる側面や状況は、年代によって異なり、さらに性別によっても差のみられることが明らかとなった。

40歳代男性の自己認識欲求は、対人能力や将来の姿の側面に向かいやすかった。さらにこの自己認識欲求は、社会参加意識の喪失や、心身の不調を意識することによる自己概念不明確感によって生じていた。これらの事実から40歳代男性が自己に関心を向けるのは、社会的に何らかの不適応状況に陥ったときであると推定される。自己の対人的能力を知ることによって現在の社会的な不適応状況を解消し、将来に向かって適切な社会的自己を形成しようとするものと考えられる。

40歳代女性の自己認識欲求は4層の中で最も高く、その対象は現在や将来の自分に向けられていた。また、この層では子離れ・親の衰えなどの家族問題や、未既婚の別（夫がいないこと）が自己概念不明確感に結びついていた。ただし自己概念不明確感と自己認識欲求との関連は低く、重相関係数の低さからも、自己認識欲求喚起に関する仮説が他層と比べあてはまりにくいことが示された。この点から、40歳代女性が自分に関心をもつのは、何らかの理由で不明確になった自己を再構造化するためというよりも、現在の自分を将来に向けてさらに充実させようとするためと推定される。そして充実への手がかりとして求められているのが、自分にあった趣味・スポーツ、あるいは容貌の魅力評価と考えられる。

60歳代は40歳代よりも自己認識欲求は低いが、特に男性でその傾向が顕著であり、60歳代男性は4層のなかで最も自己認識欲求が低かった。しかし彼らのなかでも、家族関係の変化や、経済状態悪化を意識している者は、自己概念不明確感を介して自己認識欲求を高めていた。また、60歳代男性の自己認識欲求は、他層と比べて“健康”“過去の意味”に向かっていた。これは、彼らの自己への関心が全体として低いなかで、健康や過去の意味の側面については、他層と同程度に関心が向けられていたことによる。

60歳代女性の自己認識欲求は、対人能力や将来の姿の側面に向かっていた。そしてこの自己認識欲求は、未既婚の別（夫がいること）や社会参加意識の喪失が背景となって生じていた。これらの事実から、60歳代女性は、夫に関連して生じる問題に直面したときや、社会とのつながりを失ったと感じるときに、自分の将来や今の人間関係を充実させようとして自己認識欲求を喚起させると推測される。ただし、自己概念不明確感を基準変数としたときの重相関係数は有意ではなく、この層の自己認識欲求喚起の背景を明らかにするためには、その他の要因を含めた分析が必要である。

自己認識欲求の発達の流れ

以上のような各層別の自己認識欲求のあり方を、発達の流れの視点からまとめると次のようになる。自己認識欲求の喚起の程度や背景は、男女で異なっていたが、まず男性は、女性よりも全体として自己認識欲求が低く、日常生活で自己に関心を向けることは少なかった。彼らが自分に注目するのは、何らかの不適応状況に陥り“自分がわからない”という感じをもったときであった。この不適応状況として、40歳代男性では心身の不調、60歳代男性では経済状態の悪化や家族の変化を感じるときが挙げられる。

さらに、男性の自己認識欲求の対象は、年齢によって変化していた。40歳代が関心を向けるのは、主と

Table 6
自己認識欲求と自己概念不明確感の背景（値は標準偏回帰係数）

説明変数	基準変数							
	40 歳代男性		40 歳代女性		60 歳代男性		60 歳代女性	
	自己認識	不明確感	自己認識	不明確感	自己認識	不明確感	自己認識	不明確感
自己概念不明確感	0.45***		0.13		0.30*		0.27*	
未婚の別	-0.13	0.01	0.02	0.29**	-0.08	-0.07	0.10	-0.22*
就労形態	0.03	-0.04	0.04	-0.09	-0.07	0.01	-0.08	0.03
経済状態悪化	-0.06	0.13	-0.06	0.15	0.09	0.47***	0.08	0.02
心身の不調	-0.06	0.39***	0.03	-0.00	-0.01	0.13	0.02	-0.01
家族関係の変化	-0.10	-0.02	-0.00	0.29**	0.11	0.23*	0.19+	0.10
社会参加意識喪失	0.22*	0.13	0.15	-0.01	-0.06	-0.11	-0.15	0.22*
重相関係数	.51***	.49***	.22	.41**	.39*	.52***	.36+	.29
N	99	99	96	99	94	100	93	99

注) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .1$.

して他者関係における自分であったが、60 歳代では健康や過去の意味など、社会的・対人的文脈とは切り離された側面に関心が移行した。これは、彼らが自分を把握する際に、自分の過去と現在の自己を比較する手段を相対的に多く用いるようになることが原因ではないかと考えられる。従来の研究では、老人期には青年期や中年期よりも、過去の自分と現在の自分を比較することで自己評価をする自己理解手段が、他者と自分を比較する手段よりも有力になると指摘されている (Suls & Mullen, 1982; 高田, 1992)。60 歳代男性が自分の過去に注意を向けやすいという本調査結果は、この傾向を確認するものといえる。

なお、従来、60 歳代男性の自己のあり方を問題とする場合には、定年退職との関連が注目されることが多かった (岡本・山本, 1992)。しかし本調査では、職業の有無が直接自己認識欲求に影響する結果は得られなかった。これらの点から、定年という出来事そのものが男性の自己への関心を高めるといよりも、家族・経済面の否定的変化など、定年によって生じた問題状況が、“自分が分からない”“自分を知らない”という自己への注目を促すきっかけとなると推定される。

一方、女性は総じて男性よりも自己認識欲求が高かった。男性と同様、女性でも年齢の上昇とともに自己認識欲求は低下する傾向にあったが、その落ち込みの程度は緩やかである。この点から、女性は年齢を経ても、さまざまな出来事の中で自己を意識しつづける傾向が男性よりも強いといえる。また自分について知りたい側面として“これからの人生で自分には何ができるのか”“今後どのように生きていくべきか”を挙げる割合が、男性より多い (Table 4)。以上の傾向は、40 歳代や 60 歳代の女性が自己の可能性や進むべき方

向を念頭におきながら、自己に関する情報を求めつづけていることを示している。女性は、自己を可変的なものととらえ、将来に向けて適切な方向に自己を変えていこうとする姿勢を中年期以降も持ち続けやすいものと推察される。

ただし、女性の自己認識欲求喚起の内容や状況は年齢によって変化していた。40 歳代は容貌など自己の個人的な側面に関心を向けやすいが、60 歳代では他者関係における自己に関心が向けられている。この点から女性は年齢とともに他者との関係における自己を重視するようになるかと推測される。前述のように、女性は将来に向けて自己を知りたいとする傾向が強いが、40 歳代では個人の諸側面を深く知ること、60 歳代では他者と自己の関係を知ることが、自己把握に有効と位置づけられていると考えられる。

なお 60 歳代女性は男性と同様に、自己概念不明確感を抱いた者が自己認識欲求を喚起させていたが、40 歳代では両者の関連は確認されなかった。これは 40 歳代女性が、現在不適応な状況になくても、もっと自分を知りたいと感じていることを示唆している。青年期 (上瀬・堀野, 1995) や、本研究における 60 歳代の女性でみられた自己認識欲求と自己概念不明確感の関連が、なぜ 40 歳代女性でみられないのか、本研究では明らかでない。今後はこの点を含め、女性の発達過程に中年期の自己認識欲求が果たす役割について分析を進める必要がある。

以上のまとめから、中高年の自己の発達について以下の流れが推定される。男性は全体として自己に関心を向けにくく、自己認識欲求の喚起は不適応状況に限定されやすい。このため、男性の自己は変化しにくい。また男性の場合、自己の現状を理解する際、年齢とともに、過去の自分を基準とすることが多くなる。

したがって、自己概念が年齢とともに堅固になっていくといえる。そして、自己情報を他者から得る必要がなくなるため、自己認識欲求は年齢とともに低下していく。

一方女性も、全体として男性よりも自己に関心を向けやすく、自己を可変的で柔軟なものにとらえている。特に40歳代の女性は、強い不適応状況になくても、現在や将来の自分をさらに充実させるため自己情報収集を積極的に行う傾向にある。また女性も年齢とともに、他者関係の中で自分をとらえようとする傾向が強くなる。他者と適切な関係を築くためには、他者関係の中での自己を明確にする必要があるため、女性は、年齢を重ねても自己への関心が継続しやすいと考えられる。

以上のように、自己認識欲求の発達の流れは男女で異なり、このため自己認識欲求の喚起の様子が、年齢とともに男女間で大きく異なってくると結論づけられる。

時間的展望との関連

これまで時間的展望の文脈で行われてきた研究では、発達にともない、自己について重視する側面が現在の自己から将来の自己へと変容していくと指摘していた(都筑, 1993; 白井, 1991)。中高年を対象とした本調査において、側面別に自己認識欲求をみると、全体として自己の可能性の側面に特に関心が高かったという結果は、従来の時間的展望研究の論考を確証するものといえる。本研究の結果は、個人が関心をもつ自己の側面から時間的展望の広がりを推測したものであり、さらに性差が生じる背景を分析するなど、従来の研究よりも具体的ななかたちで自己発達の内容を示すことができたと考えられる。

自己認識欲求の仮説との対応

上瀬(1996)では、自己認識欲求は自己概念不明確感によって喚起されると仮説されており、大学生を対象とした調査でこれが確認されている(上瀬, 1996; 上瀬・堀野, 1995)。本調査でも分析の結果、さまざまな状況が自己概念不明確感を生じさせ、それが自己認識欲求喚起を促すという流れが全体として示された。ただし、年代別にみると、40歳代女性では自己認識欲求と自己概念不明確感との間に強い結びつきは示されなかった。これは、自己概念不明確感が生じなくても、自己理解を求め自己情報を収集しようとする心理機制が存在することを示すものである。したがって今後は、自己概念不明確感をともなわないで生じる自己への関心を含めて、自己認識欲求の生起機序を広げて理論化するとともに、さまざまな年代に同様の質問紙を実施するなどの手続きを経てこれを確認していく必要が残されている。

本研究の問題点

本調査では多くの人々を対象として全体的な自己への関心の程度を明らかにすることを目的として質問紙調査を行った。しかし、項目の多くは直接的な質問であり、自己認識欲求喚起の背景に関する各項目数も限定されている。今後は、調査形式や質問項目を清廉し、より詳細に自己認識欲求の心的構造を検討することが必要である。

引用文献

- エリクソン E. H. 仁科弥生(訳) 1977 幼児期と社会1 みすず書房
(Erikson, E. H. 1950 *Childhood and society*. New York: Norton.)
上瀬由美子 1992 自己認識欲求の構造と機能に関する研究——女子青年を対象として—— 心理学研究, 63, 30-37.
上瀬由美子 1995a 中高年の自己認識欲求 日本心理学会第59回大会発表論文集, 69.
上瀬由美子 1995b 自己認識欲求の背景——40代有職者を対象として—— 日本教育心理学会第37回総会発表論文集, 580.
上瀬由美子 1996 自己認識欲求と自己概念不明確感の関連 東京女子大学紀要“論集”, 46, 83-98.
上瀬由美子・堀野 緑 1995 自己認識欲求喚起と自己情報収集行動の心理的背景——青年期を対象として—— 教育心理学研究, 43, 1-9.
久世敏雄 1980 青年期とは何か 久世敏雄・加藤隆勝・五味義夫・江見佳俊・鈴木康平・斎藤耕二(共著) 青年心理学入門 有斐閣 Pp. 1-27.
レビンソン D. J. 南 博(訳) 1980 人生の四季——中年をいかに生きるか—— 講談社
(Levinson, D. J. 1978 *The seasons of a man's life*. New York: Knopf.)
西平直喜・五味義夫 1979 自己をみつめる——青年分析の展開—— 大日本図書
岡本祐子 1985 中年期の自我同一性に関する研究 教育心理学研究, 33, 295-306.
岡本祐子・山本多喜司 1992 定年退職期の自我同一性に関する研究 教育心理学研究, 33, 185-194.
白井利明 1991 青年期から中年期における時間的展望と時間的信念の研究 心理学研究, 62, 260-263.
Suls, J., & Mullen, B. 1982 From the cradle to the grave: Comparison and self-evaluation across lifespan. In J. Suls (Ed.), *Psychological perspectives on the self*. Vol. 1. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 97-125.
高橋恵子・波多野誼余夫 1990 生涯発達の心理学 岩波書店
高田利武 1992 他者と比べる自分 サイエンス社
都筑 学 1993 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, 41, 40-48.